

あさご農業委員会だより

農地パトロールを実施

遊休農地解消のため 地域をあげた取組を



朝来市農業委員会では農地法の規定に基づき、毎年、遊休農地の実態把握や、農地の違反転用などを防止するために農地パトロールを実施しています。

今年度は、8月18日に市役所本庁舎で出発式を行い、農業委員と農地利用最適

化推進委員で7班を編成し、8月22日から9月2日にかけて7日間、実施しました。調査では、前年に把握した遊休農地が、解消されているか、新たに遊休農地化した農地がないかも確認し、再生困難な農地の非農地判断も行

いました。朝来市内には現在、約20軒の遊休農地があり、県下では約900軒、全国では約97,000軒にもなっています。農家の高齢化や担い手不足により増加する遊休農地は、放置すると雑草が繁殖し、病虫害の発生や動物の住み家となり、周りの農地に悪影響を及ぼします。

また、各集落で積極的に「中山間事業・多面的事業（旧農地水環境保全事業）」にも取り組まれていることから、農地の保全やその利活用は有効にされています。パトロールにおける違反転用等は見受けられず、現状は営農活動と農地保全（休耕農地）のバランスがしつかりとれているように感じました。

今年度も8月に、農業委員・農地利用最適化推進委員及び事務局と共同で市内を巡回し農地の利用状況を調査しました。状況には、大きな変化も無く、年々確実に遊休農地が増え荒廃化している事は、揺るぎない事実と認識しました。要因としては、高齢化に伴う担い手不足や、耕作放棄等があげられ

ます。どのようにして担い手の育成に努めるか、又個人・地域の財産を確保していくかというところが大きな課題なのだと再認識しました。解決方法として「守るべき農地」と「それ以外の農地」を分類し、農業者の立場に立ち、迅速かつ的確な助言が伝えられる体制が必要であると思います。今まで

上に将来性が確約できよう支援すると共に、農業のよさを十分アピールする事が今後一層重要であると認識しました。地域全体で「地域計画（人・農地プラン）」の策定を！

生野区域 農業委員 楠 晃
本年8月5日に、生野区域の農地パトロールを行いました。遊休農地の状況は、例年とほぼ同じでした。一方、長年放置されていた一部の農地で、草刈りがなされるなど改善も見られました。

今こそ、地域全体で農地の適正な維持管理について話し合い、これを守るための計画策定に真剣に取り組んでほしいと思います。



高齢化、少子化、若者の地域離れなど様々な要因が重なり、ほとんどの地域で担い手不足が深刻な問題となっています。これから、個々の農業者による農地管理は、一層、困難な状況になってくる事が予測されます。そこで、美しいふるさと維持に向けた地域全体での仕組みづくりがより重要になってくると思います。その大きな役割を果たすのが「地域計画（人・農地プラン）」であると考えます。



審議内容	7月	8月	9月	10月	11月	計
農地法第3条 農地の売買・貸借	3	2	5	7	5	22
農地法第4条 農地の自己転用						0
農地法第5条 農地の転用売買・貸借	4	2	2	3	3	14
非農地証明申請	1	1	1	2	3	8
空き家に付随する農地の指定			1		1	2
農業経営基盤強化促進法による農地の貸借	10	12	32	2	8	64

総会での審議件数



守るべき農地

山東第一区域
農業委員 奥藤 康正

農地法

Q & A シリーズ (20)

農業用ハウスにかかるQ & A

Q 農業用ハウスを建てようと思うのですが補助などは受けられるのでしょうか？

A 農業用ハウス設置支援補助金として、補助対象経費に2分の1を乗じた額（限度額300万円）を交付する制度があります。また、もしもの災害へのそなえとして園芸施設共済という制度があります。どちらも必要な要件を満たす場合が対象となりますので、詳しくは各担当へお問い合わせください。

・補助金【朝来市農林振興課】Tel 672・2774
・共済金【兵庫県農業共済組合（南但事務所）】Tel 665・0215

農業への新規参入 株式会社

ジー・キューブ

今回は、今年度から夜久野高原でニンニク栽培をされている(株)ジー・キューブを取材させていただきました。



右からジー・キューブの田代さん、藤原さん、四辻さん

「なぜ農業を？」

本社は神戸の半導体製造設備の会社です。すでに医療系にも進出しており、食と健康にも関係する事から、養父農業特区でのニンニク栽培の話をお願いした時に、これはチャンスだと思い全くの異業種の農業に参入しました。

「現在の経営規模は？」

養父市から始まり、2019年に和山町宮の圃場を借りました。農業初心者で社員の四辻秀男さん(58歳)が和山町に転入されました。作業においては、

本社や地元の企業と連携し、通常は一人で5畝の圃場を管理しています。設備機材は、圃場の肥料散布や、映像、色彩を視たりする各種ドローン3機、用途に応じた大型トラクター3台を保有しています。

「目指している事は？」

農業で成り立つには、販路や収益がないと難しいです。そこを指しているのではなく、ドローンや、機材を上手く連携させて得られる情報から、自社のノウハウを蓄積しながら分析や解析を行い、数値化します。そして、

て、バラツキのある圃場からでも一定の収量や品質の物が得られるようにシステム化し、低コストや省力化など関連出来るもの全てをひとまとめに出来るようにするのが、我々の存在意義であり、ねらいなのです。今年度からは圃場がさらに広くなったので、大型機械の性能をフルに活用し、今後の計画をたててやっていけそうです。

「苦労している事は？」

一人で作業を行っているため、安全管理には一番注意しています。そのため本社からでもどこからでも、圃場が見渡せるようにウェブカメラを設置し対策はとっています。他にも電子機器を使用するため電気設備を早く整えて欲しいです。

「今後は？」

今まで知らなかった第一次産業のしんどさも身をもって体験し勉強させてもらっています。会社の目標に沿っていくためにも、今後はニンニクだけではデータ不足のため他の物もやっていくだろうし、広さも変わったので作業のやり方も違ってくるでしょう。

継続して成果を出していく事は難しいです。

プロジェクトを成功させ、販売やサービスにも特化し、農業だけではなく幅広く異業種への連携にもつなげていきたいです。

当日は、神戸から来ていただき、藤原さん、田代さんからもお話を聞かせていただきました。本当にありがとうございました。

(山野)



ドローン操作中

令和4年度

認定新規就農者紹介

10月6・7両日にわたり令和4年度認定新規就農者3名のうち2名の方に取材をさせていただきました。



枚田地区の圃場

岩津ねぎ愛がすごい

福本学・寛子

「岩津ねぎとの出会い」

福本学さん寛子さん夫妻は東大阪でサラリーマンをされていたが、大阪で開催されていた「ひょうご田舎暮らし臨時相談所」で朝来市のブースに立ち寄られたことが朝来市就農への始まりとなりました。

ある時、道の駅で手にした岩津ねぎの美味しさに驚きこの地で岩津ねぎを栽培しようと決意されました。

した。そして3年間に地元農家で学び、現在とは地元農家の支援と指導を受け野菜と岩津ねぎ1.5畝を栽培されています。

「販売」

販売先は地元の方に紹介された給食センターとJA、道の駅やネットによる大阪、東京方面へ。ねぎ苗の一部はホームセンターにも卸されています。

「希望・喜び」

何とか「岩津ねぎブランド」を絶やしたくない、皆に「岩津ねぎの美味しさを知ってほしい」と努力を重ねJA主催の

品評会で令和3年度最優秀賞を受賞するまでになりました。

また、ドローン等の使用を進め、栽培の省力化を推進、若い人の岩津ねぎ栽培への参入を手助けしたいと話されています。

将来は病害虫に負けない野菜や岩津ねぎ栽培を目標とし現在取り組んでいる化学肥料と農薬を極力使用しない有機農業を確立し、消費者が笑顔になれる美味しい野菜と岩津ねぎを作りたいと話されています。

福本農場です。

32歳 専業農家への転身

森下省吾

「転機」

「今年から新規就農者になりました」と取材を受けて話された森下省吾さんには兼業農家から専業農家への決意を感じ取りました。

4年前にお父さんからの誘いで帰郷、その後農業と会社員の兼業でしたが祖父の代から耕作していた50坪から、いつの間にか4畝になり専業農家への決心をされたそうです。話の中にもこれからの農業に対する不安と希望が見て取れました。

「現在」

水稲約4畝、岩津ねぎ15坪、合鴨農法水稲13坪に取り組んでおられます。この地区周辺でも農家が減り確実に作付け面積が増えてきている中で、水稲だけでなく他の作物の栽培も考えられているようです。

「希望」

将来の夢として農業の法人化、繁忙期の雇用ができるように経営を拡大していきたいと考えている、「その年、その時期にあったものを見極め」専業農家として自立したいと話されています。

(西村)

令和4年度 認定新規就農者

(枚田) 福本 寛子さん
(竹田) 森下 省吾さん
(物部) 西田 周平さん

編集後記

水稲苗購入の補助、肥料購入の補助等の農家にとってはありがたい支援を受けました。

しかし、農地パトリールを実施していると感じることは毎年同じ農地の荒廃状況です。そのような中、今回の取材で新規就農者皆さんの素敵な笑顔で話される言葉の中に農業に対する情熱を受け止めることが出来ました。私たちも笑顔になれるうれしい取材でした。

農業者「ジー・キューブ」の取材では異業種組織から農業に対する新しい取り組み方を学ぶことが出来ました。少しでも記事を通じて両者の熱い息吹を感じてもらえたら嬉しく思います。

(西村)



農業用倉庫の前で